

2歳児の比喩的再命名に関する日誌法的研究

——標識化の発達——

鈴木 情 一

要 旨

比喩の原初的形態は、見立てをことばによって表現するものであるとの前提に立って、1人の幼児の1歳11ヶ月から2歳9ヶ月までの比喩的再命名（見立ての言語表現）を収集、記録した。幼児は比喩的に再命名されたものが元のものとは異なるとの意識を言語表現上で表出するとの仮定の上立って、再命名に伴う言語標識の種類と発達の傾向とを追及した。その結果、標識を表出しない段階から、様々な種類の標識を駆使する段階へ、そして「～みたい」という標識を伴う直喩表現へと変化・発達することが確認された。

KEY WORDS

pretending	見立て	marking devices	有標標識
metaphorical renaming	比喩的再命名	spontaneous speech	自発的発話

問 題

ここ数年間の間に心理学の領域でも比喩に関する研究が行われるようになってきた。その研究の多くは児童や成人を対象にした理解の研究である。しかも材料として使用される比喩はその大半が児童文学を含めた文学作品からの引用であり、残りは研究者の自作である。このように見てくると、比喩の生産や理解は児童期以降に特有の詞姿であり、幼児期と無関係であるかのような印象を受ける。比喩のみならず、ジョーク、ユーモア、地口、そしてなぞなぞといった言わば高尚な言語芸術は幼児と無縁なのであろうか？

比喩の研究を幼児と無縁とする態度の背景には、幼児にはことばそのものを対象化して操作する能力が欠けているという考えと「隠喩の解釈というのは一種の言語パズルの解読であると言ってもよいぐらいに、知的なものであり、そのような知的能力は、小学生の高学年から、中学校にかけて発達するものと考えられる」（永野 1983）といった考えがある。

前者の能力に関しては、ここ10年の間にメタ言語的能力の研究が進み、幼児でも各発達段階に応じ、習得した文法やレキシコンに照らして自分の発話や他者の発話をモニター、チェックし、さらにはその文法的適切さや意味的受容性を判定できることが明らかにされてきている。幼児は前言語的段階に獲得した意味構造を背景にもって、他者の発話を聞き取り、そこから表現の仕方に関する仮説を立て、他者の発話をチェックすると同時に自分の発話をその仮説に照らしてモニターしながら、各発達段階に特有の文法を形成していくのである（鈴木 印刷中）。

後者の考えかたは、それが解釈（理解的側面）に限定されているとはいえ、それを素直に受け取ると、隠喩の理解や生産という能力は学校教育の中で始めて芽生えるものであるかのよう

にとれる。この考えは、隠喩というものを高度に意識化されたことばの芸術であると限定し、文学的なものだけを隠喩として取り上げようとするものである。

隠喩にはその生産や理解を準備する能力や発達段階があるとして、その発達の過程を追及する努力がほとんど為されてこなかったことにその原因がある。さらに、比喩に関する定義が混乱していたことにも原因があろう。確かに、子どもが文学的レベルの比喩を生産したり、理解することは不可能と言ってもよいであろう。しかし、その原初的な形式は子どもの日常生活に溢れているのである。

中村(1977)は比喩表現の成立する基盤について触れている：「……，ある事物をほかのある事物に似ているとする判断がそのまま比喩になるのではなく、実際には別々の事物だという明確な認識のもとに、その両者の類似性をとらえ、一方にたとえるという修辞意識を持つ時に、初めてそれが比喩表現となる基盤が得られるのだ、……」。ここから比喩表現の成立する基盤を構成している3つの条件が引き出せる。1つは、本義と喩義の指示物が別々のものであるという意識、2つ目は両者の類似性をとらえること、最後は一方を他方にたとえるという意識である。意識ということが2つの条件の中で触れられているが、意識をそれ自体で捉えることはできない。いや、意識は表現することによって初めて意識となるし、他者に理解されえるものとなる。まして、幼児の場合では直接問うことが不可能であるし、説明も不十分なものとなる。従って、こうした条件を操作的定義として捉えなおし、間接的に意識の有無を追及することになる。

幼児によることばの比喩的使用に関する研究は数少ない。実験・調査にもとづくものは2～3を数える限りである。その中の1つ Winner, E. (1979) は幼児の比喩の発生的起源を幼児の見立て(Pretending)に代表される象徴能力に見出した。彼女は「ある名称の代わりに他のものを置き換えることは、語の転移を含むことによってメタファーの最も単純な形式を成す。周知の対象に新しい名称を与えること、これが比喩的言語の最初に出現する土俵である」と考え、Brown, R. (1973)の研究で採集されたAdamの発話資料を分析・検討した。幼児によることばの比喩的使用(Figurative use)は、見立てに代表される象徴に関する研究とメタ言語的能力の接点に位置する研究である、これが彼女の研究の立場を示すことばである。

Winner, E. (1979)によるメタファーの定義とそれを含む幼児の比喩的再命名(Metaphorical renaming)の分類方法を確認しておく。

- (1) 初期の指示について：「ある語を指示対象に適用するとき、子どもはその指示対象をその語を含むカテゴリーのメンバーとして扱っている」—字義的命名。
- (2) 「この語が通常は適用されない指示対象に、ある語を適用するときには、その子どもは2つの要素間の類似的な関係を表出しようと意図している」—対象間の類似。
- (3) 「メタファーとは、語や句や文、さらにはことばのより大きな要素が、その使用される通常の文脈から新奇な領域に転移された詞姿を指す」—定義1
- (4) 「2つの要素を結合するものは、隣接性にもとづく連想であってはならない。そのGroundは観察者にとって明白なものでなければならない」—Groundについて。
- (5) 「メタファーとは、語を、その慣習的な指示物への類似性を基礎に新奇な指示物へ拡張することである」—定義2
- (6) 「語を類似性を基盤(Ground)にして新奇な指示物へ拡張すること、これがメタファーを形成する」—定義3

彼女はどのように比喩を定義し、つぎの問題について追及した。

(1)比喩と象徴遊びの関係、(2)初期の比喩の Ground の種類、(3)乗り越え (Overriding) の度合、(4)その諸形式について。

本研究は、Winner の問題との関係では、(4)の比喩の表現の諸形式を詳らかにする。この問題に関する彼女の前提は、つぎのようなものである：「メタファーの符号化には、①聞き手の要求に対する子どもの感受性、②メタ言語的な自覚の度合、とが反映される。“like”によってメタファーを標識化することは、陳述が字義的には真でないことを告げることになる。従って、有標識の表現 (The marked form) はメタ言語的な自覚の存在を意味し、発達的には後れることが予想される。」年齢別の有標比喩と無標比喩 (The unmarked metaphor) の比率をとった結果、2歳児では有標表現がなく、3歳児では等数、4歳では有標表現が無標の2倍の出現度数であることがわかり、この予想は実証された。

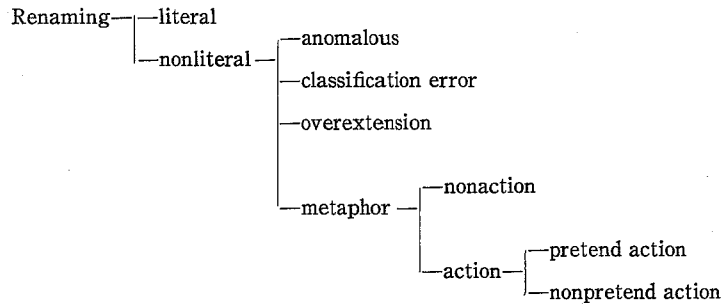


図1 Winnerによる再命名の分類

彼女は又、幼児期の比喩 (比喩的再命名; Metaphorical renaming) をつぎのように分類している (図1)。本研究では収録の段階と分類の段階の2つの段階で一定の条件を設けて、この表の Metaphor のみを取り上げることにした。

Winner, E. (1979) 以外で実験・調査的研究をおこなっているのは Billow, R. M. (1981) である。彼は2歳後半から6歳までの幼児の幼稚園における自発的発話を収集、分析し、その結果つぎのような結論を導いている。それは、ごく年少の幼児でも比喩的言語を恒常的かつ意識的に使用している。しかも、要求に応じてその意識を表現することも可能である。幼児の語の使用の仕方は混乱や認知的な誤りではなく、比喩的能力であると。

見立てに関する研究は従来象徴的能力に関わるものとして研究され、その言語的側面に関しては疎かにされてきた。そこでは見立ての能力を検討するための手段に過ぎなかった。象徴的遊びの発達段階については Nicolich, L. M. (1977) が詳しいものを提出しているが、ムヒナ (1979) と高橋 (1984)、ガーベイ, C. (1977) を参考に、見立ての発達段階を表1にまとめた。

又、Winner, E. (1979) と Billow, R. M. (1981) の実験的研究の結果と Gardner, H., et al. (1978), Winner, E., et al. (1980) の提案する発達段階を参照して、比喩的言語の発達段階も表1に示した。

本研究の目的は、①2歳児の比喩的再命名に関する事例を収集し、その特徴を分析すること、②幼児は比喩的再命名をおこなうにさいして、その再命名が字義的には真ではないということを経験的な表現を選択することによって伝達していると考え、その表現の装置 (有標標識) を発達的に明らかにすること、の2点にある。白い紙切れを空中に投げて、幼児が「チョーチ

表1 対物行動から見立て、そして比喩の発達過程

対物行動	見立て・比喩
<p>①あらゆる対象（物）を口に持っていく。2～3の動作を適用</p> <p>②口に持っていく前に対象を点検する。</p> <p>③動作（取り扱い方）と対象との適合。物は適切な、慣習的用法に従って使用される。</p> <p>④物と物とを適切に組み合わせ使用して使用する。</p> <p>⑤適切な動作パターンを自分で、物や他者の代理物（人形等）に適用する。</p> <p>⑥他者や他者の代理物（人形等）に対象に適合した動作パターンをさせる。</p> <p>* 人形が相手になる</p> <p>* 人形を動作主体にする。人形の発話を代弁する。</p> <p>⑦眼前にない物もあると仮想して動作を適用する。</p>	<p>物の動作的理解</p> <p>眼前にある物を動作レベルで変形して（動作的見立て（Action-metaphor）別の物の代理とする。</p> <p>* 字義的名称の獲得</p> <p>変形（見立て）以前に変形動作を行う→聞かれると字義的名称を答える。</p> <p>変形以前に変形動作を行う→聞かれると比喩的名称を答える。</p> <p>* 1つの顕著な類似点（特徴）にもとづく再命名</p> <p>知覚的再命名（動作以前に、又は動作を伴わずに変換し、比喩的名称で自主的に命名）有標化標識を伴う再命名（特に、直喩）</p> <p>* 2つ以上の特徴に基礎を置く再命名（The multiple-grounded metaphor）</p> <p>眼前にない物も見立てて、再命名する。</p>
<p>児童期前半</p> <p>児童期後半</p> <p>青年期</p>	<p>字義的名称への偏好</p> <p>* 対比的比喩（The proportional metaphor）</p> <p>比喩的表現への志向性の増加（様相間の結合、言い換え可能、心理的表現：真の比喩の生産と理解）</p> <p>形式理論の操作（深化と創造、文学的）</p>

「だよ！」というとき、彼女はその舞う紙片を本当に「蝶」であるとは思っていない。彼女は白い紙片の舞う様子からそれを「チョーチョ」に見立てているに過ぎない。両者が同一の物であるとは思っていない。「だよ！」が彼女のその意識を表現している。

方 法

被験児 著者の第2子（3人姉妹の2女、観察当時は姉1人の2人姉妹）。1980年10月17日生。正常出産、妊娠期間は妊娠39週、第10月。正常分娩、頭位、体重3,140g。家族は、父親、母親、姉（3；3；25）の4人家族。歩行開始（母親が立たせてから、自立歩行3歩）は11ヶ月。母乳のみで育つ。初語は11ヶ月後半で「ママ」（母親、等々を指す）。

観察期間 観察準備期間を含めて、1歳11ヶ月8日から3歳1ヶ月22日まで（ただし、組織的観察は2歳9ヶ月29日まで。有標形式が日常的に安定して使用されるようになったと判断したので中止した）。

観察方法 父親による日誌法的観察（筆記記録）。事象を単位として、比喩的再命名の対象物とそれに関連する幼児の行動を、その発話とともに記録した。母親による報告もあるが、それはごく小数である。なお、ビデオ、カセットによる記録もおこなったが、補助的な使用に留めた。

観察時間 被験児の自然な生活状態での発話を採集することを目標として、平日：朝はぼ7時から8時、夜：はぼ6時から9時とした。日曜、祭日もこの原則を基本的には守ったが、目立ったものについては記録の対象とし、日中の発話も記録に留めた。

採集条件 Winner (1979) は Brown (1973) の被験児 Adam の発話資料を分析の材料としたために、比喩的再命名と判定されるものはすべて抽出して、図1のように分類した。本研究では下記の条件を充足するものだけを収集・記録することにした。即ち、図1の分類の中で、Anomalous, Classification error, Overextension を最初から除外するよう心掛け、さらに整理の段階でもチェックをおこなった。ここで分析の対象とするものは、Nicolich (1977) の象徴遊びの発達段階に位置づけるならば、4. 結合的な象徴遊びの段階と5. 計画的な象徴遊びの段階にあって、ことばを伴うものを収集したことになる。なお、各種の非字義的再命名の判定基準は Winner, E. (1979) にもとづいた。彼女の分類でいうならば、この研究は図1の Metaphor（無標形式）と Simile（有標形式）を収集したことになる。

(1) 前提：①幼児（Y）がその対象本来の使用（操作）法に通じていること、又は、その対象について日常経験、絵本、テレビ等々で既知であることが父母により確認されている。②幼児（Y）がその対象の字義的名称を過去に正しく使用したことがあると父母により確認されていること。③又は②のいずれか一方を少なくとも充足していること。

(2) 要件：①見立ての存在、②再命名の存在、③ Topic と Vehicle の Ground が父母により認定されること、④発話の前後に行為を伴う場合には、行為と再命名の一致、を充足するもの。なお、今回の分析は表現形式に限ったこともあり、判定を緩めてある。

観察・記録上の諸注意点 ①観察者側から遊びを組織立てない。②日常生活の中で見立てや再命名を直接指導・教示しない。③記録は原則として、発話の生起直後におこなう。④特殊な物が対象となっている場合には、その特徴を詳しく記述・描出する。⑤姉、父母等の直後模倣再

生と判断されるものについては記録しない。⑥幼児の発話は勿論、関係する姉、父母の発話や行為も記録する。⑦幼児、又は観察者が病気、旅行、出張等々で生活を共にできない場合は観察・記録をしない。⑧記録には、「付録」、「参考」と明記して、被験児の言語発達に関わる材料も記録する。⑨その他。

結 果

観察・記録した発話は事象が単位となっているので、再命名を単位とすると1つの発話記録に2つから3つの再命名が含まれている場合がある。原則として、再命名を単位として分析したが、中には判定を場面の記述にもとづいて2つの再命名を1つと数えた場合もある。

今回は標識の有無とその分類に分析を限定してその結果を報告する。

記録数 分析の対象とした再命名の数を月別に見ていくと、つぎのようになる。なお、「2 ; 3」という表現は2歳3ヶ月を示す。1 ; 11—15例, 2 ; 0—16例, 2 ; 1—56例, 2 ; 2—45例, 2 ; 3—37例, 2 ; 4—55例, 2 ; 5—70例, 2 ; 6—61例, 2 ; 7—40例, 2 ; 8—43例, 2 ; 9—20例, 参考として2 ; 10—3例, 2 ; 11—2例, 3 ; 0—1例, 3 ; 1—1例。1歳11ヶ月から2歳9ヶ月までの合計は458例, 残りを加えると465例であった。

本研究はまず第1回目の予備的分析で標識のないものとなんらかの標識のあるもの, そして「～みたい」といういわゆる直喩標識のあるものに3分し, ついで第2回目の分析で標識のあ

表2 類型下位分類別の初出年齢, 平均月齢, 最出年齢

類型	下位類型	初出年齢X	平均月齢	最出年齢Y	(順位)		類 型
					X	Y	
A :	A-1	1 ; 11 ; 8	26.0	2 ; 1	1	1	
	A-2	1 ; 11 ; 21	26.3	2 ; 3	2	3	1
B :		2 ; 0 ; 22	26.8	2 ; 2	5	2	3
C :	C-1	1 ; 11 ; 28	27.7	2 ; 5	3	5	
	C-2	2 ; 1 ; 7	29.4	2 ; 5	6	5	
	C-3	2 ; 2 ; 2	29.8	2 ; 7	7	12	
	C-4	1 ; 11 ; 28	29.0	2 ; 4	4	4	
	C-5	2 ; 2 ; 9	29.2	2 ; 6	9	9	2
D :	D-1	2 ; 2 ; 15	28.6	2 ; 6	10	9	
	D-2	2 ; 8 ; 23	—	—	17	—	
	D-3	2 ; 4 ; 21	—	—	12	—	
	D-4	2 ; 2 ; 4	31.5	(2 ; 5)	8	5	
	D-5	2 ; 5 ; 21	—	—	15	—	
	D-6	2 ; 6 ; 15	—	—	16	—	
	D-7	2 ; 4 ; 15	29.6	(2 ; 6)	11	9	4
E :	E-1	2 ; 4 ; 24	31.2	2 ; 9	13	13	
	E-2	2 ; 5 ; 12	30.7	2 ; 5	14	5	5

注：「—」：度数が10未満なので省略した。()：参考年齢

るものを主としてその標識の種類によって分類することをおこなった。そして、学会発表（鈴木 1985）のごとくAからEの5類型に分類した。その後は各類型ごとに標識の違いに応じて、下位の分類を試みた。

以下は、その分類結果である。その前に、類型・下位類型別の初出年齢、平均月齢、度数の最大の年齢、順位を一覧表に示しておく（表2）。

類型A（Vehicleのみを表出するもの）

A-1：単語、又はその繰り返し

- 例 1：「クック」
 2：「ペッペ」
 3：「バナナ」
 4：「あめ、あめ（飴）」
 5：「トンネル、トンネル」

*初出は1歳11ヶ月8日で、平均月齢は26.0ヶ月であった。

*月別の記録数は、1；11-12, 2；0-7, 2；1-26, 2；2-15, 2；3-7, 2；4-2, 2；5-5, 2；6-7, 2；7-1, 2；8-1, 2；9-1の合計84例である。

A-2：名詞句の形をとったもの、又は呼び掛けを伴うもの

- 例 1：「ゾーさんのボーチ（帽子）」
 2：「クマタンのおうち」
 3：「ママ、ボーチ」

*初出は1歳11ヶ月21日である。平均月齢は26.3ヶ月である。

*月別の記録数は、1；11-1, 2；0-2, 2；1-3, 2；2-1, 2；3-4, 2；4-2, 2；5-1, 2；6-1の合計15例である。

なお、このA-2にはすでに分類した類型Bを加えていない。

類型B（TopicとVehicleの両方が表出されるもの）

1. 「バキューン、バキューンの箸」（注：「バキューン」は鉄砲のこと）—自発的
2. 「ペッペのぼーち」（注：「ぼーち」は帽子のこと）—自発的修正
3. 「ペッペのボート」—父親のQによる修正（注：「ペッペ」はお風呂のこと）
4. 「ペッペのボート、取って！」—自発的
5. 「ペッペ、ぼーちのペッペ」—父親のQによる喚起（自発的）
6. 「パパ、ボートのペッペよ」—自発的
7. 「バックのペッペ」—自発的
8. 「ベットのペッペ、あったかいね！」—自発的
9. 「こたつのペッペもあったかいね！」—自発的
10. 「おうちのタオルよ」—自発的
11. 「コマのかさよ」—自発的
12. 「ドカンのおうち」—父親のQによる修正
13. 「つちのすな」—父親のQによる修正

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 14. 「フーセンのごはんよ」—自発的 | ↓
出現順序 |
| 15. 「ボアのシュッポッポ」—自発的 | |
| 16. 「アメのボールだ」—自発的 | |
| 17. 「パパのお山」—自発的 | |
| 18. 「みかんの道よ」—自発的 | |
| 19. 「水の花火だよ」—自発的 | |
| 20. 「ハトポッポ、水のペッペに入ってるよ」—自発的 | |
| 21. 「ユーコねずみさんは、こうやって食べるんだよ」—自発的 | |
| 22. 「お水のおひげだよ」—自発的 | |
| 23. 「花火だよ、お水の花火だよ！」—自発的 | |

*初出年齢は、No. 1 の 2 歳 0 ケ月 22 日。

*月別で最も出現度数の多いのは、2 歳 2 ケ月の 9 個 (No. 7 ~ No. 15) である。

*最後の No. 18 は、2 歳 9 ケ月 13 日。

*月別では、2 ; 0-4, 2 ; 1-2, 2 ; 2-9, 2 ; 3-3, 2 ; 5-1, 2 ; 6-1, 2 ; 7-1, 2 ; 8-1, 2 ; 9-1。

*平均月齢は、26.8 ケ月 (約 2 歳 3 ケ月)

注釈：No. 4, 12, 13 の父親の Q による修正は、父親が「違うよ、ポートだよ」という表現で、彼女の最初の命名を否定し、新しい名称を導入した場合である。それ以外は「えっ、ぼうしなの!？」という表現であり、直接の否定ではない。

類型 C (標識化意識の比較的弱いもの、又は提示形式)

C-1 : (基本形)

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{パパ} \\ \text{ママ} \\ \text{ハイッ} \\ \text{ホラッ} \\ \phi \end{array} \right\} + [\quad] + \left\{ \begin{array}{l} \text{よ} \\ \text{だよ} \\ \text{ですよ} \\ \text{だもん} \\ \text{だぞー} \end{array} \right\}$$

注： $\phi + [\quad] + \phi$ の形式は除く。
又、他の類型として分類されたものを除く。

例 1 : 「パパ、おちゃらよ、おちゃら」

2 : 「 スプーンよ、スプーン」

3 : 「ホラッ、フーセンガムだよ」

4 : 「パパ、アイス」

5 : 「 スキー だもん」

6 : 「 ライオン だぞー」

* 「見て、おふろ」 (2 例)

* 「パパ、めめ、めめ」 (1 例のみ)

*初出は 1 : 11 ; 28, 平均月齢は 27.7 ケ月である。

*月別の出現 (記録) 度数は 1 ; , 11-1, 2 ; 0-3, 2 ; 1-19, 2 ; 2-10, 2 ; 3-12, 2 ; 4-17, 2 ; 5-20, 2 ; 6-9, 2 ; 7-6, 2 ; 8-3, 2 ; 9-1 の合計 101 例である。

C-2 : 見立てられたものの機能, 属性, 取り扱い方等が表出されるもの

- 例 1: 「ヒコーキだよ、飛ばないよー」(2; 5; 11)
 2: 「シャンプーつけたよ、洗ったよ」(2; 5; 15)
 3: 「テレビ、見えるよ」(2; 4; 18)
 4: 「イッタンのベッドよ、入っちゃだめ！」(2; 4; 15)
 5: 「ママ、ジュースどうじょ」(2; 1; 26)

*初出は、2歳1ヶ月7日で、平均月齢は29.4ヶ月であった。

*月別の記録数は、2; 1-3, 2; 3-1, 2; 4-7, 2; 5-10, 2; 6-6,
2; 7-9, 2; 8-1, 2; 9-2の合計39例であった。

**なお、B-1とB-2を合わせた平均月齢は28.1ヶ月であった。

C-3: (基本形)
$$\left\{ \begin{array}{c} \text{これ} \\ \text{あれ} \\ \text{ここ} \\ \text{こんどは} \end{array} \right\} + [\quad] + \left\{ \begin{array}{c} \text{だよ} \\ \text{よ} \\ \text{ね} \\ \text{だよね} \\ \phi \end{array} \right\}$$

- 例 1: 「これ、アンパン だよ」(2; 7; 28)
 2: 「これ、犬 ね」(2; 3; 3)
 3: 「あれ、すべり台だよ、すべれるんだよ」(2; 7; 3)
 4: 「ここに入って、ここ動物園」(2; 7; 28)
 5: 「まくらだよ、これ」(2; 7; 29) (倒置形)

*初出は2歳2ヶ月2日で、平均月齢は29.8ヶ月であった。

*月別の記録数は、2; 2-3, 2; 3-4, 2; 4-6, 2; 5-2, 2; 6-4,
2; 7-9, 2; 8-7, 2; 9-3の合計38例である。

C-4: 文枠組み(Sentence frame)の中で使用している(Vehicleとしての見立て表現が動詞(述部)と意味的に呼応しているもの)

- 例 1: 「おうちこわれたった」
 2: 「クマさん、いちごのセーター着てるよ」
 3: 「パパ、シャワーかけるよ」
 4: 「タバコ吸ってるんだよ」
 5: 「イッタン、プールに入るのよ」

*初出は1歳11ヶ月28日で、平均月齢は29.0ヶ月である。

*月別の記録数は、1; 11-1, 2; 1-2, 2; 2-1, 2; 3-3, 2; 4-8,
2; 5-4, 2; 6-1, 2; 7-4, 2; 8-5, 2; 9-2の合計31例であった。

C-5: 発見(見立ての成立を直接表現したもの)

- 例 1: 「あっ、タンタン(卵)だ！」
 2: 「おいモだ！」
 3: 「テントームンのお家だ！」
 4: 「雪だ、雪！」
 5: 「たまご！」

*表現のみならず特に場面に関する記述を参考に判定した。

*初出は、2歳2ヶ月9日であり、平均月齢は29.2ヶ月であった。

*月別の記録数は、2 ; 2-2, 2 ; 3-5, 2 ; 4-1, 2 ; 5-1, 2 ; 6-7, 2 ; 7-1, 2 ; 8-4の合計21例である。

類型D (標識化意識の比較的強いもの)

D-1 : 例「イッタン, お医者さんよ」— [自称詞+ (名詞) - (よ)] : 基本形

	イッタン	お医者さんよ		
	イッタン	うさたん		
	イッタン	鬼	よ	
	イッタン	鳥さん	よ	
*14例で、初出は2 ; 2 ; 15	ぼく	は	タオル	です
*平均月齢は28.6ヶ月	イッタン		お魚	よ
*月齢別記録数24-1	イッタン		モグラ	さんよ
28-4	ぼく	は	ロボット	だぞ
29-1	ぼく		熊さん	
30-5	イッタン		ぞーさん	
32-3	ユーコ		赤ちゃん	
	イッタン	パーマン	よ	飛べる よ
	ユーコ	おかあさん		
	(私)	犬	だよ	ワンワン

D-2 : 例「ユーコ, ハエじゃないよ」— [自称詞- (名詞) - (否定詞) - (よ)]

	ユーコ	くも	じゃない	よ
*3例	ユーコ	ハエ	じゃない	よ
*2 ; 8 ; 23 (初出)	ユーコ	は	いす	じゃない んだから

D-3 : 例「ママ, ブタよ」— [他称詞- (名詞) - (よ)]

	ママ	ブタ	よ	
*6例	ネータンも	ブタ	よ	
*2 ; 4 ; 21 (初出)	あなたは (父)	フーセンガム	だ	
*平均月齢29.3ヶ月	ネータン	雪だるまん		
	ママ	モグラさん	だ	
	パパ	トラさん	ね	

D-4 : 例「窓がブーブーになっちゃった」— [(名詞) - (名詞) - なる(X)]

	窓が	ブーブー	なっちゃった
*12例	フーセン	餅	〃
*2 ; 2 ; 4 (初出)	〃	ソーセージ	〃
*平均月齢31.5ヶ月			

	(ビスケット)	象さん	なったの
	こうすると (テイッシュ)	胤	なります
注：29ヶ月-3, 35ヶ月-3,	(マットレス)	プール	なっちゃった
32ヶ月-2, 33ヶ月-2。	うさちゃん	ボート	なっちゃった
注：格助詞「に」は省略した。	ネータンが	お化け	なったんだ よ
	(卵焼き)	ヘビ	なっちゃった
	こうすると (物干しの)	チョーチョ	なるんだ よ
	(ミカン)	『6』	なった よ
	(ミカン)	『8』	なった よ

D-5：例「イッタンのに似てるよ」- [(名 詞)- (名 詞)- 似る- (X)]

	(タオル)	なんにも	似て <u>ない</u>	よ-Q
* 4 例	(チンチン)	アイスに	似てる	よ-Q
* 2 ; 5 ; 21 (初出)	(人物TV)	さと子の声が	似てる	よ
	(白い花)	イッタンのに	似てる	よ
	参考：あっ,	パパとおんなじ!	(2 ; 4 ; 24)	

D-6：例「これ、まくら、本当のまくら!」-

	うその	◇これおもちゃじゃないよ, <u>本物</u> だよ,
	本物の	ペロペロキャンディー
	(プラスチック)	<u>うその</u> ガム よ
* 5 例	(湯入りのキューピー)	<u>うその</u> お酒 よ
* 2 ; 6 ; 15 (初出)	(時計)	これ, <u>本当の</u> かざぐるま だよ
	(毛布)	これ, まくら, <u>本当の</u> まくら

D-7：例「パパ, イッタン, 花つくったよ!」-

	できる	パパ, イッタン, 花作った よ
	※そうやると	ブランコ, できた よ
	※する	おだんご できた よ
		おうちが できた よ
* 13 例		ホラッ, ゆびわが できた よ
* 2 ; 4 ; 15 (初出)		ドア できた よ
* 平均月齢29.6ヶ月		バスに 乗るよ, ママの作った
* 記録度数		<u>パンダさんだよ, そうやると</u>
28, 29ヶ月は各3例,		ホラッ, スカートできた よ
30ヶ月は4例, 31ヶ月は2例		見て見て, <u>ノントンの顔するから</u>
		ママ, 何できたと思う? <u>おさかな</u> よ
		ネズミさんのごはんつくった よ
		パパ, おやまつくって

D-8 : その他

- ① これ、ぞーさんよ、あんよあるよ、しっぽ
ないけど!
- ② これは紙じゃないの! お面なの!
- ③ (父親「これ、箱に入ってるね!」)
一ちがうよ、ペッペに入ってるんだよ
- ④ これ、ベッドじゃないよ、プールだよ
- ⑤ ユーコねずみさんはこうやって食べるんだ
よ
- ⑥ パパ、お布団がプールだったんだよ
- ⑦ つまみ食いする人はネズミさんだよ
- ⑧ (絵本のネズミを指差して) これ、ユーコ
だよ、ユーコがチューって出て来たんだよ
- ⑨ バナナじゃないよ、チューリップよ

D-9 : その他

1. 「(自分のこと) てんとう虫がもぐって来たよ」 2 ; 7 ; 11
2. 「タバコだよ、タバコ吸ってんだよ」 2 ; 7 ; 14
3. 「カミナリさんのおしっことうんちが降って来るよ」 2 ; 8 ; 18

類型 E (直喩, 明喩: ~みたい)

E-1 : Topic と Vehicle の両方が表出されるもの

- a. 「ネータン, おさるさんみたい」 2 ; 4 ; 24 (初出)
- ネータン 豚
ネータン コアラタン
ユーコ 女の子
パパ お医者さん(2)
赤ちゃん おさるさん 2 ; 9 ; 0
チューリップ 飴 ね
- b. 「これ, イチゴみたい だね」 2 ; 5 ; 12 (初出)
- これ, シャービック φ
これ, ぞーさんみたい だね
これ, おふねみたい だね 2 ; 9 ; 27
- c. 「あれ, ライオンみたい だ」 2 ; 10 ; 10
- d. 「すずめが死んだみたい」—[(すずめが死んだ) みたい] 5 ; 2 ; 21
- e. 「パパのチンチン, アイスみたい, 動くんだもん」—Ground を表出 2 ; 9 ; 17
- f. 「チンチン, アイスみたいな形してたよ」—Ground を表出 2 ; 10 ; 20
- g. 「パパの顔は, 毛のついてるガイコツみたい」—修飾語句 2 ; 7 ; 7
- h. 「島だよ, ふねみたいに動くんだよ」 2 ; 8 ; 28

E-2 : Vehicle だけが表出されるもの (文末の助動詞, 終助詞による分類)

- a. 「ぞーさんみたい ね」 2 ; 5 ; 12
 まる
 ぶた 2 ; 5 ; 23
 ウンチ
- b. 「お化けみたい」 2 ; 5 ; 23
 赤ちゃん
 ウンチ
 ブーちゃん
 アイス
 パパの顔みたい, おひげはえてて—修飾語句 (限定), Ground の表出
 パンダさんのあんよみたい—修飾語句 (限定)
 ロボットみたい, 頭にこうすると—Ground の表出
 おばーちゃん
 かいだん 3 ; 1 ; 22
 おばーちゃんのおっばい—修飾語句 (限定)
- c. 「赤ちゃんみたいよ」 2 ; 5 ; 23
- d. 「おかあさんみたいだね」 2 ; 5 ; 26
 おしっこ
 ぞーさん
 パパみたいだね, およいでるんだもん—Ground の表出 2 ; 10 ; 10
- e. 「パパ, おばーちゃんみたいでしょう」 2 ; 8 ; 26
 * Topic と Vehicle の両方が表出された最初の年齢は, 2歳4ヶ月24日。
 * Ground が表出されたのは, 2歳5ヶ月25日 (〜おひげはえてて) が最初である。
 * 限定の修飾語句が付いたものは, 2歳6ヶ月7日 (パンダさんのあんよみたい) が最初である。
 **直喩 (〜みたい) の初出年齢は, 2歳4ヶ月24日 (ネータン, おさるさんみたい) である。
 **月齢別では, 2 ; 4—2, 2 ; 5—11, 2 ; 6—7, 2 ; 7—3, 2 ; 8—3, 2 ; 9—6, 2 ; 10—3 (3 ; 1—1 [参考])。
 **上の分類では, 連続的に表出された重複分を含むので37例となっている。
 **37例の直喩表現から3歳1ヶ月22日の分1例を除いた平均月齢は, 30.7ヶ月である。

全体のその他

1. 「あっ, ママのおしっこの音だ!」 (2 ; 6 ; 18)
2. 「ユーコがたたいたんじゃないよ, ブタさんだよ!」 (2 ; 8 ; 11)

各類型について 類型Aは, A—1とA—2に下位分類された。A—1は再命名が1語, 又はその繰り返しの形をとって表現されたものである。例1の「クック」のTopic (本義) は約20cm四方のおもちゃの布団を足の下に各1枚ずつ敷いて, 歩きながら表現したものである。今回の分析ではGroundについての分析はおこなわないが, この例はWinner (1979) のいう「Ac-

tion metaphor」の一種である。

A-2は主に所有の格助詞「の」（幼児の文法として見ると、このように言えるかどうか困難である）を含む名詞句が全体として1つの再命名の役割を果たしている例である。その他1部に「呼び掛け」+「再命名」という形も含ませた。A-1とA-2の関係を表2で見ると、当然の如く語数の多いA-2がすべての指標で後れている。この2つの類型は標識のないものであり、たとえ Topic と Vehicle とを区別しているとの意識があったとしても、表現上には現れていない。

類型Bは、素材（字義的名称）と見立て（比喩的名称）がともに表出されているものである。意味的に考えるとさらに下位分類が可能であるが、ここでは区別しないでおく。No.2や12に見られるように、自分の見立てに対して父親が反論すると、父親の見立てと自分の見立てを結合して表現するのは、一方で見立てを安定使用している証拠とも取れるが、他方ではその見立てに対して多少の不安定感をもっている証拠とも取れる。No.22, 23の例は、字義的名称と比喩的名称を両方ともに知っており、かつ素材としての「水」とその一時的な見立てに伴う比喩的名称をはっきりと区別していることを示している。出現順序で見えていくと、同じ表現形式をとってはいても質的な転換をはっきりと見られる。

類型Cは他の類型に入らないが、一定の標識をもつものを集めて分類したいわば雑居集団である。特に、父親や母親に自分の見立てを提示する形式を中心に分類したものである。特に、C-1とC-3は指示代名詞、代名詞、等を用いて提示する相手（父親、母親）の注意を喚起してから、比喩的名称を表出し、ついで文末の終助詞や助動詞等によってその名称はあくまで比喩的で、一時的なものであると伝える形式と考えられる。例えば、例1は「パパ、私はこのこたつの上に置いた薄いゲームウォッチを、お皿に見立てたんだよ！」という表現に匹敵する内容をもっている。

C-3は同じように提示形式であるが、主に指示代名詞によって見立てる物や場所を表現している。その意味で、そうした表現のないC-1よりも出現年齢が後れる。C-4は比喩的名称が発話（文）の中で動詞の意味と自然に呼応して、1つの文を形成していることに着目したものである。それ以外はC-2と区別する根拠はない。両者を合わせて1つの類型としてもよいと思える。それに対して、C-5はその発せられた場面の記述をも併せると、独自の類型を形成している。この類型はC-1, C-3のように〔見立て〕→〔表現〕といった時間的ずれを感じさせない。ある物が別のある物に見えた、その見え方の成立がその表現において初めて実現されたというものである。このように表現して初めて見立てが成立した（意識化された）のであろう。川本（1982）が「名づけ」と称して説明している例を挙げる：「……，山道を歩いていた人が地面に恰好な丈夫そうな木の枝が横たわっているのに気づいて、「ああ、いい杖があった」と言って拾い上げた、とする。この際、一定の形をした、一定の色の木質の塊りが、この人が『杖』と名づけたことによって杖として出現した、始めて存在するに至った、と解釈することが可能である。」

類型Dの内、D-1, 2, 3は意味的制約 (Semantic constraints) に違反する例と役割取得 (Role-taking) に関するものをまとめたものである。D-2はさらに否定詞を含む表現である。いずれも Topic と Vehicle の区別が明確に成されていると考えられる表現類型である。なお、「イッタン」とは家庭での彼女の愛称であり、彼女自身の自称詞でもある。

D-4とD-7は「なる」、「つくる」、「できる」という動詞を基礎にして類型化したもの

である。いずれも素材と対象（見立て）の区別は完全に成されているといえる標識である。D-5は「似る」という動詞を含むものであり、「似ている」という表現は2つの対象がある点で似ている（他の点では似ていない）という意識を含むものであり、標識としてかなり強力なものと考えられる。D-6は「本当」、「本物」、「うそ」ということばを含むものである。例の1つでは、「(おもちゃのキャンディーを) これおもちゃじゃないよ、本物だよ、ペロペロキャンディー」と表現し、実際になめる真似までしている。勿論、彼女はそれが父親に買ってもらったおもちゃのストアーに付属していたオモチャのキャンディーであることは、ストアーを使った遊びの中で十分承知している。

最後の類型Eは、「～みたい」という狭義の直喩標識を使用している発話である。E-1はE-2よりも後れて出現している。初出年齢で見ると、D-2, 5, 6よりも早い時期に出現しているが、その他のものよりは後れて出て来た。Winner (1979)の結果と比べると、無標形式よりは後に出現している点で一致してはいるものの、年齢的にはかなり早くから使用されることがわかる。出現度数の最大の年齢は2歳5ヶ月である。なお、現在2歳3ヶ月の3女（1歳5ヶ月より発話の記録を取っている）で「～みたい」という表現が出現したのは2歳2ヶ月が最初であった。

最後に ①比喩的命名が無標形式から有標形式へと変化・発達していくことがわかった。②有標形式とはいっても、Winner, E. (1979)の挙げていた直喩（「look; look like」の有無によって判定される）だけではなく、様々な形式を幼児が使用していることがわかる。その標識は多かれ少なかれ、幼児がTopicとVehicleを明確に区別していることを示している。幼児は実在の事物とそれをイメージの中で一時的に変形した物とを明確に区別し、その区別の意識をも、比喩的再命名と一緒に発話の中でその場に応じた標識を使用して表現しているのである。③ここで報告した分類結果は、分類の基準が一貫していないことや、クロス分類をおこなっていない点、標識の種類を区別する言語学的基準を欠いている点など多くの欠点に満ちたものである。その理由は分類を根拠づける文献やモデルがないことによる。1つの切り口を示した試論に過ぎない。④幼児がこのようにいろいろな標識を使用する、使い分ける、その条件を明らかにしなければならない。幼児はどのようなときに有標表現を用いるのか、さらにどのような条件に応じて標識を使い分けるのか、残された問題は数多い。

引用・参考文献

- Billow, R. M. 1981 Observing spontaneous metaphor in children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 31, 430-445.
- Brown, R. 1973 *A first language: the early stages*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Gardner, H., Winner, E., Bechffer, R., & Wolf, D. 1978 The development of figurative language. In K. Nelson (Ed.), *Children's language: Vol. 1*. New York: Gardner Press, 1-38.
- ガーベイ, C. 1977 『「ごっこ」の構造』高橋たまき訳 サイエンス社。
- 川本茂雄 1982 「詩の言語」川本茂雄他編『言語学から記号論へ』講座 記号論1 勁草書房188。
- ムヒナ, B. C. 1979 『幼児心理学』川崎道夫他訳 明治図書。
- 永野重史 1983 「子どもは詩人か—大人のレトリックと子どものレトリック—」中村 明編『日本語のレトリック』講座日本語の表現(5) 筑摩書房 244。

- 中村 明 1977 『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所報告 57 秀英出版 111。
- Nicolich, L. M. 1977 Assessment of symbolic maturity through analysis of pretend play. *Merrill-Palmer Quarterly*, 23, 89-99.
- 鈴木情一 1985 「幼児期初期における比喩的命名—直喩について—」日本教育心理学会第27回総会発表論文集 262-263。
- 鈴木情一 印刷中「幼児の文法能力」『幼児の言語心理』第4章 大日本図書。
- 高橋たまき 1984 『乳幼児の遊び—その発達プロセス—』新曜社。
- Winner, E. 1979 New names for old things: the emergence of metaphoric language. *Journal of Child Language*, 6, 460-491.
- Winner, E., McCarthy, M., & Gardner, H. 1980 The ontogenesis of metaphor. In R. P. Honeck, & R. P. Hoffman (Eds.), *Cognition and Figurative language*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates, 341-364.

The Diary Study of a Two-year-old's Metaphoric Renaming

—Development of the Marking Devices—

Seiichi SUZUKI

ABSTRACT

On the presupposition that giving new names to familiar objects is the first appearance of metaphoric language, one child's spontaneous utterances with pretending were collected. The data for this study were transcription of one female child's spontaneous speech between the age of 23-33 months.

The focus of this study was the various linguistic devices which marked the child's awareness that the name given was not actually the object's literal name. The marking devices also ensure that the listener does not have to decide whether the statement is literally true or not.

458 utterances including the metaphoric renaming were obtained. They were classified into five categories on the basis of their marking devices.

The main results of this analysis were as follows: ① The marked form increased with months and developmental trends from unmarked forms to marked forms was identified. ② The two-year-old used more varieties of marking devices than expected from previous studies. ③ The simile (the typical marked form indicated by the term *like* or *look like*) appeared first at 28 months of age and increased rapidly with months.